

いの町 菊池学園だより (第35号)

今回の菊池学園だよりは、6月30日に行われた川内小学校6年生算数科の公開授業について紹介します。

今年度、川内小学校の《少人数による話し合いのある授業の成立》のための

ポイント1：学び合うための動きのある対話・話し合いのゴールイメージは、解決に向けて自分の考えを持ち、伝え方を自ら選択している授業です。具体的な取組や手立ては、①ペアやグループ、全体での対話・話し合いの場を設定、②質問し合うことで考えを広めたり深めたりする場の設定、③ノート対話 の3点です。

ポイント2：挙手⇒指名⇒発表のみからの脱却のゴールイメージは、児童の考えをつないで、広げたり深めたり、まとめたりする授業、よく見て聴いて考え、「頭をつかった」と感じる授業です。具体的な取組や手立ては、①全員発表、②児童の考えをつなげる意図的指名です。

右の写真は、授業者の渡辺睦先生が前時までに1/5黒板に生活面、学習面で大切にされている価値語が書かれていました。



授業は「比 割合の表し方を調べよう」の導入場面でした。6名の児童は、校内外から25名以上の参観者がいたのでとても緊張していましたが、渡辺先生が緊張をほぐすためにアイスブレイクを始業前にを行い、明るい雰囲気での授業が始まりました。



本時のめあては「秘伝のレシピを使って同じ味のソースをたくさんつくる方法を考えよう」で、オーロラソースやハンバーグソースのような複数の材料を混ぜ合わせてつくるソースをたくさんつくるためには、それぞれの素材の分量は比を使えば良いことに気付かせる授業でした。

冒頭では、先生が実際にケチャップ（大さじ1）とマヨネーズ（大さじ1）でオーロラソースや、ウスターソース（大さじ2）とケチャップ（大さじ3）でハンバーグソースを作り、児童の興味・関心を高める工夫をされていました。

2人分のオーロラソースはそれぞれの素材も1杯ずつ増やせばできますが、ハンバーグソースは同じように1杯ずつ増やしても同じ味にならないことを確認し、2人分、3人分のウスターソースとケチャップのそれぞれの量をどのようにして求めるのかを、班で考えていきました。

班での話し合いだけでなく、隣の班の友達の考えを聞きに行く場面も見られました。少人数のため、これまではグループ学習や友だちの発表を聞いて反応することがあまりなかったようです。渡辺先生は4月から学校のリーダーだから言葉の力を大事にすることを伝え続けてきました。そうして徐々に、発表を聞いて反応ができるようになってきたようです。



これからポイント1の②質問し合うことで考えを広めたり深めたりすることができるように、授業づくり、学級づくりを進めていけることでしょう。



いの町 菊池学園だより (第35号)

1度目の話し合いのあと、全体でハンバーグソースの2人分を作る時に必要な量を確認をし、そのことを「表」「図」「文字」で表す活動に移りました。この活動は、3つのうちどれで表現するか確認し、新しいペアで2度目の話し合いを行いました。これまでの授業でポイント2を意識し、全員がどれでも発表できるように取り組まれてきたことが分かりました。

それぞれの考え方を発表後にまとめを書き、教室の後方で輪になって集まり、交流を行いました。この活動について研究協議で「友達と輪になって、ホッと自分の思いが出せていたのではないか。発表に対して「わかりました」という反応から、(目指している)質問や反応へと成長していくのが楽しみだ。」との意見がでました。

目指している学級のゴールイメージに向けて、児童の実態に応じた取組をしていることが分かる公開授業でした。



研究協議について

昨年度まで教育研究所主催の町研部会(年4回)が、今年度は他校での公開授業に1回は参加する形に研修体制が変更となりました。川内小学校には、伊野小学校から3名の先生が参加されました。「他校の先生方と交流できたことで、研修の内容が深まりました。」「他校からの意見を交流したことで、より有意義な校内研修となりました。」等と参加者から感想が出ていました。



菊池先生の講話では、多くの先生方が悩まれているポイント1「学び合うための動きのある対話・話し合い」において、どこで、どのようにして対話・話し合いを深めていくかについてお話されました。



対話の肝は「**質問**」です。

授業のなかで質問が出ないのは、

- ①質問を必要とする授業でない(知識注入に偏った授業が多い)。
- ②他者の目を気にして質問ができない。
- ③質問や対話の経験がない。

が一般的だと言われています。

①を改善することが授業改善になります。通常の授業で先生は4/5程度の時間、話をしていると言われていいます。そこで学活などの時間に、先生が話す時間を1/4に減らし、子ども同士が質問し合える時間を増やします。先生は対話を深めたい場面では介入します。この実践例(③を改善する具体例)として伊野小学校島村先生が、昨年度4年生で行われた1分間好きものについて質問していく「なぜなぜならゲーム」を紹介してくれました。この授業を行うことで、その後の学級ディベート時もつながった質問ができたり、調べ学習にもつながったそうです。他にも、それぞれの立場を決めて考えさせたり、複数の選択肢から一つを選ばせたりするなど、対話の場面が生まれるような教師の介入(発問等)も必要です。

②については、これまでの取組の土台である「価値語の植林」「成長ノート」「ほめ言葉のシャワー」等によって培われる「一人一人違っていい」「自分らしさが発揮できる学級づくり」が関連しています。

今回の公開授業に参観した教育委員や教育委員会事務局職員から「子ども同士が互いに認め合う風土ができていて、学び合う姿がある。」との感想をいただきました。